
Street Spirit (Fade Out)

橘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Street Spirit (Fade Out)

【Nコード】

N4916M

【作者名】

橘

【あらすじ】

ガルデモ初めての告知ライブは、当然のように教師に止められた。

だが、岩沢が生前から大切にしていたギターを棄てられそうになった瞬間、彼女は教師に躍りかかる。

最後まで歌おうとする岩沢。それを阻止する教師たち。そして、彼女を助けるひさ子や遊佐。

その時、遊佐は思い出す。岩沢との日々を。

(前書き)

”Angel Beats!” 三話を下敷きとしております。視聴
されていない方は、視聴されてから読まれることをお勧めします。

私の手が、教師の足を掴む。教師が前のめりになって床に激突する。

私に出来ることは、たったこれだけ。だけど、今の貴女にはこれで充分でしょうか？ 貴女は独り、飛んでいけるでしょうか？

さあ、聴かせて。メンバーに、生徒に、そして私に。

さあ、聴かせて。貴女の歌を。貴女の、イノチを――。

「遊佐？」

空き教室で一人、椅子に腰掛けてギターを爪弾く岩沢さん。

背後から近づいていく私に気付いたのか、彼女は私に振り向く事も無く、私の名前を呼んだ。

「相変わらず熱心ですね。ひとり居残り練習とは」

岩沢さんは振り向くと、ふわっと柔らかい笑みを浮かべる。

「ごめん。もしかして待ってた？」

「いえ、別に。私のことはお構いなく、続けてください」

「ん。わかった」

演奏を続ける彼女。

私は近くの椅子を引き寄せると、彼女の背中が良く見える場所に陣取った。目の前に私がいては集中できないだろうと思っただけの配慮だ。

開け放たれた窓を抜け、空へと吸い込まれる彼女の歌声。

彼女の旋律に合わせて、蠢く背筋。歌えば、彼女の白い首筋が別の生き物のようにざわめいた。うなじから滲み、きめの細かい肌を伝う彼女の汗。

私はぼんやりと、それらを見つめていた。

「…さ、遊佐。遊佐？」

気が付くと、私の目の前に演奏を終えた彼女が立っていた。

「珍しいね。あんたがそんな風にぼんやりするなんてさ」

「ああ、すみません」

「いや、いいんだけどね」

彼女はギターを外すと、代わりに椅子に引っ掛けてあったタオルを首にかける。

「いい加減疲れたわ。ちょっと休憩。行こ？」

ペットボトルのフタを開ける。飲み口に唇を寄せる。彼女の喉が鳴る。

私はその様を眺めながら、自分の飲み物に口を付けた。

自販機コーナーには私達二人だけ。もう部活の時間も終わっているからだろう、外からは運動部の生徒の声がまばらに聞こえるくらい。練習後の、熱気を帯びた空き教室とは異なり、此处はひんやりと涼しかった。自販機と彼女の放つ熱だけが、うっすらと感じられる。

「それにしても、別に練習終わるまで待つてなくても、中に入って聴いてればいいのに」

「いえ、皆さんのお邪魔になりますし」

彼女が目を細めると、ずっと私の髪に手を伸ばす。私の茶色い髪に、彼女の白い指が絡み付く。

「ふうん。別に構いやしないのに」

ツインテールにした髪のを束を、くすぐるように弄ぶ彼女の指が、心地よかった。

彼女は髪のを束をそっと自分の鼻先に当てる。口づけをする。

その仕草に、私は自分の頬が熱くなるのを感じる。くすぐったいようで、どこか安心できる、そんな気持ちがした。

「あの。止めて頂けません？」

「ん、イヤだ。嫌がる遊佐も可愛いし」

そのまま、彼女は私の髪を弄ぶ。

そんな彼女に、私は呆れたように溜息を漏らす。こんなことをする理由は分かっていた。

「で、何かありました?」

私の言葉に、岩沢さんは目を向ける。彼女の大きな瞳がゆらめいた。

「お見通しなんだね」

「まあ、勘です」

ぶっきらぼうな私の言葉に、彼女は困ったような笑みを浮かべた。そして彼女は髪から手を離し、少し距離をあけると、私に背を向ける。

「ねえ。話は変わるけどさ、遊佐のやり残した事って、ナニ?」

「さあ? 自分でも分かりません。何が私の心残りなのか」

「へえ。もしかして、遊佐も音無みたいに記憶無し子?」

「いえ、記憶はしっかりしていますよ」

大した記憶は無いですけど。

私は自嘲気味に笑う。

ずっと私は、何をやってきたのだろうか。

ただただ親や先生の言うがままに、勉強や習い事に明け暮れる日々。退屈だった。ただただ、退屈だった。

早く大人になりたかった。大人になれば誰の邪魔も受けない。独りで何でも出来る。

けれど、私のやりたい事って何なのだろう。大学受験が近づき深夜まで勉強する最中、ふと思った。

そしてそれが分からないまま、私は――。

「そういえば、さっきの曲。新曲ですか?」

その言葉に、彼女は私に向き直る。

「そうだよ。完成したら、ゆりにガルデモで使っていいかお伺いを立てるんだけど。……どうだった？」

岩沢さんが大きな瞳で私を見つめる。その瞳に映る自分の姿。彼女と違って何も無い、ただただ空虚な私の姿。

私はぎこちなく、けれどなるべく優しく、笑みを浮かべる。

「素敵でしたよ」

「ん、ありがと」

「ただし、その曲がガルデモで採用されるかについては、恐らく難しいでしょうね」

私の言葉に、岩沢さんはやりと挑発的に笑うと、こう言った。

「へえ。どうしてそう思う？」

「バラードでは派手な戦闘音を掻き消す役割を果たせない」

「まあね」

と言うと、彼女は肩を竦めた。彼女は笑っているけれど、私にはその笑顔が、どこか寂しそうに見えた。

「それ以前に、今までとは全然違う曲調じゃないですか。どういう心境の変化です？」

今までの曲は明るくて希望に満ち溢れた歌詞に、疾走感溢れる曲調が殆どだった。まるで岩沢さん自身のように、眩しかった。それに比べて、さっきの曲は岩沢さんの明るさとはまるでかけ離れた、寂しく暗いものだった。

「うん。というか、アレが本来の私だよ。多分だけど」

ココだけの話だけだね、と言って、彼女は傍にあるベンチに座る。私もそれに倣い、彼女の隣に座った。

「ガルデモでやってる曲ってさ、如何にもガールズバンドって感じするじゃない？ 正直、あんま好きじゃないんだよね」

彼女は目を細める。

「私さ、ココに来て自分の部屋をあてがわれて、そしてその部屋にこのギターがあったとき、本当に嬉しかった。これからは好きなんだ

け音楽が出来るぞって、そう思ったんだ。暫くして、ひさ子達と仲良くなってバンド組んで、ゆり達に出会って。ガルデモって名乗ってからは協力してくれる人達が沢山出来てさ。そのおかげで結構大掛かりなライブも出来るようになった。ファンの数もどんどん膨らんでいって、皆が私の歌を聴いてくれた。それがとても、嬉しかったんだ」

そこまで言うと、下を向いて呟いていた岩沢さんが、唐突に前を向く。彼女の目付きは鋭く、私はその眼光にぞっとした。

「だけどさあ、私気付いたんだよ。今の私は自分のやりたいことなんてやっていないって事に。ただ私は、皆に気に入ってもらうための曲しか作ってなかったんだよ。耳障りのいい歌詞に、ノリのいい曲調。全部それっぽいだけ。ただそれだけの中身の無い曲だったんだ。本当にがっかりしたよ、自分自身にさ。お前、要らないよって思っちゃったんだ」

彼女はゆっくりゆっくりと、心に溜まった膿を吐き出すように呟いた。

「だから、この曲を作ってるんだ。自分の中にある言葉や音を探して、それらを紡いで。私の、私だけの曲を、作ってるんだ」

ここまで言って、岩沢さんはぐぐつと背筋を伸ばしはじめる。今の彼女からは先程の眼光が感じられず、どこか諦めたような色を湛えていた。

「だけどさ、上手くないかないんだよね。生きてたときは、それこそ頭の中から水が湧くみたいに、歌が思いついたのに。下手くそだけど私らしい、私のイノチが籠った、そんな歌が思いついたのに。今はそれがどんなものか、思い出せない……」

はあ、と彼女は大きな溜息を付いて俯いた。そのまま黙り込む彼女。私は地面を覗き込む。けれど、地面に水滴が落ちた跡は見られなかった。

私が黙っていると、沈黙に耐えられなくなったのか、岩沢さんは私の方に顔を向け痛々しい笑顔を向けた。

「ゴメンね。愚痴に付き合わせちゃって。どうも駄目だなあ。やっぱりこの曲はボツかなあ」

その言葉に、私の口から溜息が出た。深くて長い、溜息が。

私は彼女に笑顔を向ける。とびきりの笑顔に、とびきりの悪意を込めて。

「それで貴女は、また中身の無い曲を作り続けるんですか？」

「え？」

「貴女は、そうやって報われなかったはずの生前を美化して、ここで漫然と音楽を続けていくんですか？ 皆に認められていることだけを慰みにしながら、周りの目に怯えながら」

「遊佐……」

「もしそうなら、貴女は今すぐギターを捨てて、他の生徒と一緒に真面目に授業を受けるべきです。貴女に音楽は必要無い、そういうことですから」

そう言った瞬間、乾いた音がした。

自分の頬がひりひりとする。

目の前では、岩沢さんが凄い形相をして、手を上げていた。けれどその目はすぐさま見開かれ、自分のしたことを悔やむような、酷く辛そうな顔に変わる。

「……言葉が過ぎました。失礼します」

踵を返すと、呼び止める岩沢さんの声を見捨てて走り去った。

岩沢さんから逃げるように走って、やがて息が切れて立ち止まり。私は酸素を求めて喘ぎながら、嗚咽を漏らさないようにするので精一杯だった。

ごめんなさい。ごめんなさい。

貴女を悲しませたくなんて無かったんです。

だけど、あの時の貴女の顔を見るのが嫌だったんです。あの時の、何かを諦めたような表情。あれは私の表情だったから。

周囲の期待に答えるために、ただ漫然と勉強に明け暮れた日々。少しずつ少しずつ、自分が腐って駄目になっていくのを心の隅で感じていた。私は大人になっても今のままなのではないだろうか。ただただ働き、ただただ無為に生きているだけ。そう感じるようになっていた。生きていて何が嬉しいのか。何で私は生きているのか。一体こんな日々はいつ終わるのか。早く終わりたい、早く終わりたい。そんなことばかり考えていた。

貴女には、貴女にだけはそんな思い、させたくなかった。

寮に戻り、自分の薄暗い部屋に入るやいなや、私は床に小さくうずくまる。自分に対する苛立ちと、彼女に対する罪悪感。意識が闇に落ちるまで、私はそんな思いに苛まれ続けた。

それから一週間。私はずっと岩沢さんを避け続けていた。

彼女の事が気にならないといえば嘘になる。けれど、彼女を見るのが怖かった。

学校が終わると、取り立てて用も無く、私はすぐさま部屋に戻ってしまう。まだ明るいうちに帰ってみた自分の部屋は何処か寂しく、生前の自分の部屋を思い出させる。

私は制服も脱がずに、そのままベッドに突っ伏した。ここで勉強なんてする意味が無いし、夕食までやる事が無かった。

今まではどうしていたのだろうか？ そうか、いつも岩沢さん達の邪魔にならないよう、練習場所の近くで彼女達の演奏を聞きながら、本を読んでいたりしていたんだった。では、その前は？ そう思い、記憶を辿るも何も思い出せない。きっと、何もしていなかったのだろう。我ながら寂しい人間だ。笑えてくる。

ずっとこのままなのだろうか。また私は、下らない日々を送るだけの存在に戻ってしまうのか。

「それは……嫌だな」

うっすらと意識に膜が張り、意識が途切れようとした頃、ドアを

ノックする音がした。

「はい」

返事が無い。不審には思ったが、ここではそんな人間など居やしない。私は構わずドアを開けた。

「岩沢さん……」

「や」

そこには神妙な面持ちの岩沢さんが居た。

「中に、入りませんか？」

いつもなら淡々と言えた台詞も、今日ばかりは気が重かった。

「ん、ここでいいよ。そんな大した用じゃないし」

そう言っていると、彼女は数枚の紙を手渡した。五線譜に音符と詞が書かれた、バンドスコア。

「あの時の曲、あれからずっと作ってたの。ずっと部屋に籠って、誰とも会わずに。ホント馬鹿みたいにさ。だけど、これで多分完成したと思うから」

その言葉に、自然と頬が綻ぶ。

「あの時は、ホントにごめん」

と言って、彼女が頭を下げる。

「いえ、私の方こそ酷い事を言ってしまった」

少し笑うと、顔を上げて恥ずかしそうに私を見た。

「まあ、確かにキツかったけど。だけど、本当に遊佐の言うとおりだった。死んでも死に切れないほど未練があったからこそ、ここに来ることが出来たのに。ここでやっと手に入れたいのを掴む事が出来るのに、それを手放そうとするなんて。私が馬鹿だった」

ありがとう。そう言って彼女は私を抱きしめる。

「これは遊佐のおかげで完成させることが出来た。私の本当に作ってた曲、私のイノチそのものなんだ」

私はゆっくりと、彼女の腰に手を廻す。

「私は何もしていません。貴女が願って、悩んで、そして手に入れたものです。だから、貴女だけのものなんです」

「うん。だけどさ、人は一人じゃ何も無いと思うんだ。ガルデモや戦線の皆、何より遊佐が居てこそ私のなんだよ。だから遊佐。最初に聴いてみてくれない？」

「ええ、喜んで——」

——会場に彼女の声が染み渡る。今までの曲とは全く異なる、彼女自身の音楽。

そこには成長や愛といった、そんなポジティブなメッセージなどはまるで無かった。

あるのは、音楽以外に希望を見出せず、その音楽すら奪った、理不尽な世界への憎しみと怒り。それが低くて暗いメロディに、偏執的なまでに込められていた。

やがて、その怒りはいつしか音楽自体に向けられる。出会ってからこそ、好きになって夢中になったからこそ、絶望感。愛していたからこそその深い憎しみが、彼女の口から、引き裂くような歌となって現れる。

けれど曲の中盤、テンポが変わると同時に、歌が一変する。

歌われるのは、どうしようもなく憎らしいけれど、手放す事ができない音楽への想い。それはやがて、自分を裏切った世界への祈りへと姿を変える。

その祈りは、彼女の澄んだ美しい歌声に合わせて、一つの大きなうねりを生み出して、高く高く空高く、天に届くように、舞い上がっていった——。

私は自室で独り、電気も付けず、ベッドを背に座り込んでいた。傍らには岩沢さんのギター。彼女が最期の曲を演奏した、いわば彼女の遺品。

先程までの喧騒は嘘のように静まり返り、ライブの音響の所為だ

ろう、ぐわんぐわんと耳鳴りがするだけ。

そんな中、彼女の声が、耳から離れない。

「ねえ、遊佐。こんな噂知ってる？　ここで自分の願いを叶えた人間は成仏してしまうって噂」

「聞いたことはありませんが」

本番前の舞台裏。彼女と私の、最後の会話。

「もしかしたら、今日これを歌ったら、成仏しちゃうかもしれないね。……ねえ遊佐。もし本当にそうだったとしたら、あんたは私を、止めるのかな？」

私はその言葉に逡巡した。

私の傍に居て。そう、言いたかった。

けれど、結局私から言えたのは。

「確かに岩沢さんに居なくなっただけは欲しくはありません。けれど、貴女の生き方は貴女だけのもの。貴女の生き方を尊重したいから、私は貴女を止めたりはしません」

その言葉に、岩沢さんは優しく、けれど少し悲しげに微笑んだ。

「ありがとう」

ギターを触る。ひんやりとした木目の細かいボディー。持ち主の温もりはもう、そこには無かった。

けれど彼女の体温が、私から離れない。

「ここからは、一応私の遺言って事になるんだけどさ。まあ、私が消えなかったら笑い飛ばしてよ」

そう言うと、彼女は私を抱き締めた。いつもそうだった。岩沢さんは何かにつけて私に抱きついた。私は恥ずかしいからいつも嫌がっていたけれど、本当は彼女の体温がとても心地良い、そう感じていた。

「遊佐。ずっと甘えててごめん。遊佐って、初めて会ったとき冷たい印象だったけどさ、本当は凄く優しい、いい子だったよ。ずっと

私の傍に居てくれて、ありがとう。私、遊佐のこと、好きになって良かった」

「私こそ、貴女と一緒に居られて、嬉しかったです」

そう、生前は他人のことなんてどうでも良かったけれど、岩沢さんは違った。彼女のことを考えるのが幸せだった。彼女と話をして、彼女の気紛れに振り回されて、彼女の体に触れる。そんな何でもない時間が、この上なく愛しく、充実したものだった。彼女が居たからこそ、私は生きていく喜びを見出せたんだ。

「私も、貴女が居なくなったら、消えてしまうかもしれませんね」
「何で？」

「私の人生で一番満ち足りたときは、貴女の傍に居るときでしたから」

その言葉を聞いた瞬間、彼女が嬉しそうに笑った。

「何が可笑しいんです？」

「ふふっ。いや、遊佐からそんな言葉が聞けるなんてね」

ギターのネックに触れる。彼女の指が爪弾いた六弦も、幾分寂しげに見える。

けれど彼女の指は、未だに私に絡んで離れない。

「けど、遊佐。あんたはもう少しココに居てよ。で、ひさ子達を助けてやって。あの子らにも迷惑をかけ続けてきたし、私が居なくなったら、もっと迷惑が掛かるから」

「……ええ、わかりました」

私達は互いの指を絡ませる。互いの鼻先が触れ合いそうな距離の中、見えるものは岩沢さんの顔だけ、感じるのは、岩沢さんの指だけ。

「ごめん」

私は彼女が安心するように、優しい声を掛ける。

「どうしたんです？」

「本当に最後の最後まで、迷惑ばかりかけて」

「構いませんよ。貴女の望みなら何だって」

「うん。……ありがと」

その時、耳元のインカムから設営班の声がした。

私は目尻を上げて、彼女に向き合う。それはいつもの私の顔。もしかしたらこれが最後かもしれない。だからこそ、最後までいつも通りでいこうと思った。

私達の指がゆっくりと離れる。

「岩沢さん、お待たせしました。準備完了です」

「わかった。あいつら呼んでくるよ」

「お願いします」

彼女が私に背を向け歩き始める。その背に向けて。

「岩沢さんっ」

私の大声に驚いて、私に振り返る岩沢さん。

私は精一杯の優しい顔をして、彼女を送り出す。

「行ってらっしゃい」

絶叫のような、雄叫びのような、今までに無い大歓声の中、文字通り消えていった岩沢さん。

その表情は穏やかで満ち溢れてて、とても幸せそうだった。

貴女の歌、本当に素敵でした。貴女のイノチは、憎しみも悲しみも、願いの祈りも、全部ぜんぶ美しかった。

外を見る。雲ひとつ無い空に、月が皓々と輝いて。月明りが目に痛い。

気付けば私は、泣きながら、彼女の歌を口ずさんでいた。

貴女はもう居ないけれど、貴女に触れる事は出来なくなっただけ。貴女の歌が私の耳に残っているから、きっと私は生きていける。

再び貴女に会えることを信じて。
いつか、また。

(後書き)

参考楽曲

R a d i o h e a d ” P a r a n o i d A n d r o i d ” ,
S t r e e t S p i r i t (F a d e O u t) ”
C o c c o 『 雲路の果て 』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4916m/>

Street Spirit (Fade Out)

2010年10月8日14時21分発行